19　「」─近世の随筆

21年度　同志社大学

★　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

　享保元文の頃、柳瀬美仲といふ歌よみありけり。いささか復古の志もありけるとぞ。

　ある時の歌に

　　　ア初瀬路やはつ音きかまくたづねてもまだこもりくの山ほととぎす

といふ歌をよみて、おのれもいみじうよみ得たりと思ひて、日頃したしう物学び聞こえまゐらする某大納言殿の御許に参りて、この歌見せ奉るに、いとめでくつがへらせ給ひて、「今の世にかくばかりの歌よみ出づべき人またあるべしとも覚えず。かのいにしへの待宵の侍従、ものかはの蔵人、伏柴の加賀、沖の石の讃岐などがａためしにならひて、今よりこもりくの美仲とあざ名つくとも、誰かは点つかん」とほめ給はせしかば、美仲身に余るうれしさに、帰るすなはち、しれる限りの人々にも、しかじかのよし語り聞かせてほこりけるを、イ稲荷山の神職羽倉東満このよしを聞きて、をこがましきことと思ひつつ、ｂやがて大納言殿の御許に参りて、雑掌某とかいへるに逢ひて申しけるやうは、「伝へうけたまはるに、このごろ美仲が歌に、まだこもりくのといふ歌よみて、いたく殿の御褒詞にあづかり侍りしよし、誠さることや侍りし。おのれもものの心しりそめしほどより、歌の事に深く心をよせ侍るが、こもりくといふ詞は、古く『古事記』『日本紀』『万葉集』にわたりて、みな初瀬の枕詞にて侍るを、その枕詞をかく秀句にいひかくるのみならず、五言にのみいふべき詞を、上にまだの二言をそへて七言の句に用ゐ侍ること、古歌にたえてためしなきことに侍り。いかでこの歌をほめさせ給ひて、おほけなくこもりくの美仲などいふあざ名つけとはのたまはせしならん。こはさだめて、辻大路の浮きたる語り言にこそは侍らめ。ウ殿ののたまはせしならば、歌の事地に落ちたりとや申し侍らん。いと歎かはしくこそ。この疑ひうけたまはり、晴るけたくて、ことさらにまでき侍りしなり」と申しければ、雑掌も答にさしつまりて、「いかでさること侍らん。そは美仲が弟子どもなどが、おのが師の歌をかがやかさんとて、殿の御名をかりて、浮きたることをかまへ出でたるにこそ侍りけめ」とて、そこそこにしておくつ方へはひ入りて、またと出でざりければ、東満もをかしさをこらへて家に帰りけるとぞ。

注　某大納言殿　　武者小路実陰。歌人。

待宵の侍従、ものかはの蔵人、伏柴の加賀、沖の石の讃岐　　詠んだ名歌の言葉を冠して呼ばれた歌人。

羽倉東満　　　荷田春満。

雑掌　　　　　雑務に奉仕する者。

『日本紀』　　『日本書紀』。

秀句　　　　　わざとらしさの目立つ掛詞。

問１　傍線―ａ・ｂの意味として適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ａ　ためし

　１　妙技　　２　試練　　３　象徴

　４　霊験　　５　故事

ｂ　やがて

　１　さらに　　　２　そのまま　　３　たまたま

　４　しぶしぶ　　５　なんとかして

問２　傍線⌇⌇ア「初瀬路やはつ音きかまくたづねてもまだこもりくの山ほととぎす」の説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　初句の「初瀬路や」という語から同音ではじまる「はつ音」という語を導き、初瀬路を訪れた人にほととぎすの初音をもう聞いたかと尋ねたが、ほととぎすはまだ山に隠れていて鳴き声は聞こえないと言われたということを、「初瀬」の枕詞と掛詞を用いて詠んでいる。

２　初句の場所を提示する「初瀬路や」と「はつ音」という語を掛詞として用いて、ほととぎすに初瀬に行く道を聞いてみたが、まだ山にいるほととぎすは鳴き声も出さず、いっこうに答えてくれないということを四句目までに序詞を用いて詠んでいる。

３　初句の「初瀬路や」という語から同音ではじまる「はつ音」という語を導き、生まれて初めてほととぎすの鳴き声を聞こうと思って初瀬路を訪れたものの、まだほととぎすは山にいるのだなあと、四句目の「まだこもりくの」と「こもる」を縁語として用いて詠んでいる。

４　初句の「初瀬路や」という語で場所を提示して同音ではじまる「はつ音」という語を導き、その年最初のほととぎすの鳴き声を聞こうと思って初瀬路を訪れてもまだ現れないと、本来「初瀬」の枕詞である「こもりくの」に、ほととぎすが「こもる」という意味を込めて詠んでいる。

５　初句の場所を提示する「初瀬路や」と「はつ音」という語を掛詞として用い、初瀬路を訪れるとほととぎすのその年最初の鳴き声は聞こえたが、こもりくの山のほととぎすはまだ鳴いていないと、「初瀬」の枕詞である「こもりくの」を「山ほととぎす」の枕詞として詠んでいる。

問３　傍線⌇⌇イについて、「このよし」の説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　柳瀬美仲が、大納言殿から歌を非難されたのに、ほめられたと噓をついていること。

２　大納言殿が、門人の柳瀬美仲はすばらしい歌を詠んだと言いふらして、得意になっていること。

３　柳瀬美仲が、大納言殿に歌をほめられ、有名な歌人と並んで称されたと人びとに自慢していること。

４　身分の高い大納言殿が、柳瀬美仲の歌をわざとらしくほめたたえて、皮肉をこめた呼び名を与えたこと。

５　柳瀬美仲が、大納言殿に誰も詠んだことはない歌だとほめられ、歌に通じている人だけに打ち明けて喜んでいること。

問４　傍線⌇⌇ウ「殿ののたまはせしならば、歌の事地に落ちたりとや申し侍らん」の解釈として適当なものを、次の中から一つ選べ。

１　もし本当に大納言殿がおっしゃったのだとしたら、歌の道もすっかり衰えたと申しましょうかね

２　もし本当に大納言殿の御発言なら、これまでの大納言殿の歌学に矛盾していると申しましょうかね

３　もし本当に帝がおっしゃったのなら、歌の作法も乱れてしまったと申し上げてもよいでしょうかね

４　もし本当に大納言殿が名づけられたのなら、歌の歴史が台無しになったと人びとが申すでしょうかね

５　もし本当にあなたに大納言殿がおっしゃったのだとしたら、美仲の歌の価値を損ねたと人びとが申すでしょうかね

問５　傍線=「あづかり侍りし」の「し」と文法的意味・用法が同じものを、次の中から一つ選べ。

１　人またあるべしとも覚えず

２　ほめ給はせしかば

３　ものの心しりそめしほどより

４　いと歎かはしくこそ

５　申しければ

◎問６　本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

１　柳瀬美仲は幼い頃から揺らぐことのない復古の志を抱いていた。

２　柳瀬美仲は「初瀬路や」の歌を上手に詠むことができたと考えていた。

３　大納言殿は以前から柳瀬美仲に歌を学んでいた。

４　「こもりく」という通称を得た人は、柳瀬美仲で二人目となった。

５　東満は和歌の知識に自信がないと謙遜した。

６　「こもりく」は『古事記』『日本紀』『万葉集』にも用いられている詞である。

問７　傍線―について、東満はどのようなことに「をかしさ」を感じたのか、説明せよ（句読点とも三十字以内）。

　　［

］

【解答】

問１　ａ＝５　ｂ＝２

問２　４

問３　３

問４　１

問５　３

問６　２・６

問７　Ａ大納言の雑掌がＢ東満に反論できず言い逃れをしてＣ退散したこと。（29字）

評価の基準　Ａがなければ全体０。Ｂ＝６〔「主人の失態を隠す苦しい弁解をして」なども可。〕／Ｃ＝４〔「逃げた」の意味があればよい。〕

【現代語訳】

　享保元文の頃に、柳瀬美仲という歌人がいた。ほんの少し、昔の規範に倣おうという志もあったと（いうことだ）。

　ある時の歌に

　初瀬路を（ほととぎすの）初音が聞きたくて訪れても、まだ隠れて姿を見せない山ほととぎすだなあ。

という歌を詠んで、自分でもたいそううまく詠むことができたと思って、日頃から親しく学問の上で師事し申し上げる某大納言殿（＝武者小路実陰）の御もとに参上して、この歌を見せ申し上げると、（大納言は）たいそう褒めちぎりなさって、「今の世でこれほどの歌を詠み出すことのできる人がほかにいるだろうとも思われない。あの昔の『待宵の侍従』、『ものかはの蔵人』、『伏柴の加賀』、『沖の石の讃岐』などの故事に倣って、今から（あなたに）『こもりくの美仲』と通り名がつくとしても、誰が非難するだろうか、いや誰も非難するまい」と褒めなさったので、美仲は身に余るしさに、（家に）帰るやいなや、知っているすべての人々に、これこれだという（自分が絶賛された）旨を語って聞かせて自慢したが、稲荷山の神職である羽倉東満がこのことを聞いて、ばかげたことだと思いながら、そのまま大納言殿の御もとに参上して、雑掌の某とかいった人に会って申し上げたことには、「伝え聞き申し上げるところによると、今般美仲が歌で、『まだこもりくの』という歌を詠んで、たいそう（大納言）殿のお褒めの言葉をいただきましたこと（があったそうだが）、本当にそのようなことがありましたか。私も物心つき始めた頃から、歌の事に深く関心を持っていますが、『こもりく』という語は、古く『古事記』『日本書紀』『万葉集』を通じて、すべて『初瀬』の枕詞でありますのに、その枕詞をこのようにわざとらしさの目立つ掛詞として言い表すだけではなく、五言にのみ言うべき（枕）詞を、上に『まだ』の二言を添えて七言の句として使いますことは、古歌にまったく先例のないことです。（大納言は）どうしてこの歌をお褒めになって、（美仲にとって）分不相応にも『こもりくの美仲』などという通り名がつけとおっしゃったのだろうか。これはきっと、世間の根も葉もないうわさ話に違いありません。（もし本当に）（大納言）殿がおっしゃったのだとしたら、歌の道も（すっかり）地に落ちたと申しましょうかね。とても嘆かわしいことだ。この（私の）疑い（に対する返答）をうかがって、（気分を）晴らしたくて、わざわざ参上したのです」と申し上げたところ、雑掌も答えに詰まって、「どうしてそのようなことがあるでしょうか、いやあるはずがない。それは美仲の弟子たちなどが、自分の師の歌を立派に見せようとして、（大納言）殿の御名を借りて、根も葉もない話をこしらえ出したに違いありません」と言って、そそくさと（屋敷の）奥の方へ逃げ込んで、それっきり出てこなかったので、東満もおかしさをこらえて家に帰ったと（いうことだ）。